まなざし Vol.3 2024.03

ー５万点のフィルムが語る阿智村ー

ようこそ、もっと知ってほしい熊谷元一写真展へ。

約 70 年にわたって阿智村を写し続けた稀代の写真家・熊谷元一。子ども達の生き生きとした表情、生活に密着した暮らしの写真は、作品としての高い評価と共に、当時の農村生活の貴重な記録としても、多方面から認められています。時代が変わってもなお衰えない作品の魅力を多くの方に知っていただきたく、久しぶりの地元写真展を開催いたします。どうぞゆっくりご覧ください。

□ ■ □

阿智村では熊谷元一写真の今後の保存活用を考える「熊谷元一写真あり方検討委員会」を設置し、6 月の提言に向けて話し合いを進めています。その中で多くの人に元一写真を見てもらい、その成果を検証し提言にもりこむため、飯田市と阿智村で写真展を開催することとしました。同時に多くの人に元一写真の魅力を伝える機会にしたいと思っています。

開催 熊谷元一写真賞コンクール

あなたも記録写真家に！

阿智村は、膨大な農村記録写真を遺した熊谷元一氏の功績を称え、現代に生かし発展させるとともに、心豊かな生活文化を創造実現するため、「農村記録写真の村」を宣言しました。その一環として、1998 年に信濃毎日新聞社との共催で『熊谷元一写真賞コンクール』を開催し、27 年目を迎えます。

テーマ部門

熊谷元一の撮影した写真や時代をふまえながら、審査員が毎年テーマを設定して募集します。

阿智村撮影部門

テーマにとらわれない阿智村内で撮影した作品を対象にした部門です。元一作品にみられる、人を中心とした生活記録写真の精神を受け継ぐ力作を期待します。

第 26 回コンクール　元一写真大賞
「鰐口向かって力の限り」　佐山勝信

2024 年第 27 回募集概要

募集部門

・テーマ部門
　募集テーマ
　「笑顔」
・阿智村撮影部門
・高校生以下の部

賞金・副賞

テーマ部門（入賞・入選 16 点）
・元一写真大賞　1 点　賞金 10 万円
・阿智村賞　　1 点　賞金 2 万円
・他信濃毎日新聞賞、JA みなみ信州賞

阿智村撮影部門
・阿智村輝き賞　10 点　地元商品券 1 万円相当

※詳細は 4 月以降、阿智村 HP をご覧ください。賞金・副賞は予定です。

応募要項

2021（R3）年 1 月 1 日以降に撮影した未発表作品
四つ切（ワイド可）
応募締切　2024 年 9 月 27 日

熊谷元一写真童画館

開館時間　午前 9 時～午後 4 時 30 分
休館日　　火曜日（ただし祝日の場合は開館）　年末年始
入館料　　350 円（中学生以下無料）

※なお身体障害者手帳などをお持ちの方は 250 円です。
　団体（10 人以上）の場合、お一人様 300 円となります。

『農村記録写真の村』

阿智村では熊谷元一の長年にわたる村の記録写真の撮影を顕彰し、その作品を次代に受け継ぐために、平成 8 年「農村記録写真の村」宣言を村議会で採択しました。70 年にも及ぶ熊谷元一の写真による定点観測は、他に類のないものです。村ではこの宣言にもとづき、熊谷元一写真の保存活用、熊谷元一写真賞コンクールの実施などに取り組んでいます。

まなざし　Vol.3　　発行日：2024 年 3 月 15 日
作成・発行：農村記録写真の村・熊谷元一写真あり方検討委員会
事務局　　：阿智村役場　協働活動推進課　TEL0265-43-2220　kyodo@vill.achi.lg.jp

熊谷博人さん

1941 年生まれ。多摩美術大学油科卒業。ブックデザイナーとして、司馬遼太郎著『街道をゆく』(全 43 巻) をはじめ文芸書、画集、詩集などの装幀を行う。

家での元一

熊谷博人さん（熊谷元一氏長男）
東京清瀬市在住

子ども心にも父は家のことをほとんどしなかった様に覚えています。父と遊んだ記憶も殆どありません。家では写真のことや調べ物の作業をずっとしていました。お客さんが多く、夕飯が済む頃になるとどなたかが家に来て打ち合わせやら、写真の話をしていました。人が来ない日は物置を改造した暗室作業です。当時はフイルムを暗室で詰めたり、フイルム現像、プリント、水洗い、仕上げ作業を一人でやっていました。私も中学生の頃には暗室作業を手伝わされたこともあります。

写真だけでなく、文章を書いたり、もともと本業を目指していた絵本も描いたり、常に自分からテーマを決め、仕事を作り出し、その作業を続けていました。家で何もせず、ボーっとしているところを見た記憶がないほどです。そんなわけで家の仕事は母、時々は子どもにも回ってきました。

熊谷元一という写真家

飯沢耕太郎さん
（写真評論家、熊谷元一写真賞審査員）

熊谷元一さんは不思議な、めったにいない写真家だと思います。彼が写真を始めた戦前は、カメラはまだ高価で、一般の人が気軽に撮影できるものではありませんでした。プロの職業写真家以外のアマチュア写真家もいましたが、たいていはお金持ちの趣味で、風景や花などを撮影して喜んでいたのです。

熊谷さんは、そんな中で阿智村（当時は会地村）を写真で記録し始めます。村の人々の四季の暮らしや仕事をしっかりと撮影し、写真集『会地村―農村の写真記録』（朝日新聞社、1938 年）にまとめて発行しました。この写真集が大評判になり、熊谷さんは一躍写真家として注目されるようになるのです。

熊谷さんの写真が高く評価されたのは、それが単なる記録写真ではなく、村の状況を誰にでもわかるようにさし示し、未来を予想させるような力を持っていたからでしょう。写真を見ることで、記憶をよみがえらせ、自分たちの暮らしのあり方についていろいろなことを考えるきっかけになります。熊谷元一写真賞の審査をして応募者の作品を見ていると、そんな写真の力が、いまなお残っていることに気づかされます。熊谷さんの仕事をきちんと守り育てていくことで、写真を通じた村づくりにつなげていけるといいと思います。

飯沢耕太郎さん

写真評論家。主な著書に『写真美術館へようこそ』（講談社現代新書）、『深読み！　日本写真の超名作１００』（パイインターナショナル）、『きのこ文学ワンダーランド』（DU BOOKS）ほか。

検討委員に聞きました！　その３

原佐代子さん

駒場生まれ。写真集「一年生」の学年。2004 年頃から熊谷元一写真童画館のスタッフを勤める。

―写真集「一年生」の学年ですね。写真をたくさん撮られましたか？

先生が写真を撮るって行動に慣れきっていて、撮られた記憶は全然ない。生活の中で先生が撮っていることが普通だった。撮った写真を見せてくれることもなかった。写真集も大人になってから見たくらいです。

― 佐代子さんも写真に写っていますか？

私はおとなしい子だったのであまり写っていないね。写真集の中では「校長先生の話」に写っている。先生は子ども達の生活面も含めて子供達を観察していた。先生にしたら子どもが面白かったんでしょうね。

― 元一さんはどんな先生でしたか。

通りいっぺんの授業じゃなくて、先生なりの教え方っていうのをちゃんと考えて、子供の反応とか個性とかを考えて教育していた先生。本当に芯から先生だったと思う。

写真集「一年生」に「学期末は、同じように面倒をみてきたのに冷たい記号で評価しなければならない。低い成績をつけた子と顔を合わせるのもいや」といったことが書いてある。「顔も見られない」って先生が言うんだからねぇ。

卒業後も便りのない子どもの事は心配してくれる。私たちが 50 才になったときにほぼ全員の生徒を尋ねて写真を撮ってくれた。これは NHK の番組「50 歳になった一年生」にもなったの。先生が熊谷元一写真賞コンクールのために毎年阿智に来るからそのたびに同級会をやっていました。

― 佐代子さんは 2004 年頃から童画館で働かれていました。働いてみてどうでしたか。

童画館で本を見たり、民俗や教育の面からの元一研究本を読んだりして写真の価値がわかってきました。「土門拳美術館」に行って違いがはっきりわかった。土門拳の写す子どもは輪郭がはっきりしていて、生き生きはしてるんだけど。熊谷先生のはぼやーっとしてるっていうか。でもそこに子供の個性が滲み出てる。それから熊谷先生の写真が見分けられるようになってきました。

本当に自然体。額に入れる写真じゃなくて、生活そのものって感じだよね。生活の中に子供がいるって写真だと思います。

― どんな人たちに写真を見てほしいですか。

学校の先生を目指す人たちに熊谷先生の教師像を知ってほしいと思う。子どもを一つの人格と見て大事にしている。一年生の写真集から感じるのは、元一先生はその子の人格を認めている教師であり、人間であるってこと。教師である前に一人の人間なんだよね。そのことを知ってほしい。

この端の子、全然動いてないら。これが私。
先生から見たらおもしろくもおかしくもない（笑）

校長先生の話を聞く
写真集「一年生」 20p